

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館蔵奈良絵本「田村の草子」解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 岳史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002380

國學院大學図書館所蔵 奈良絵本『田村の草子』

解題と翻刻

山本岳史

一、はじめに

『田村の草子』は、藤原俊仁・俊宗父子による鬼神退治を描いた室町時代物語（お伽草子）である。俊宗が契りを交わした相手の鈴鹿御前の名前をとって「鈴鹿の草子」と題する諸本もある。俊仁と俊宗は、作品中にはっきり書かれてはいないが、それぞれ鎮守府將軍藤原利仁、征夷大將軍坂上田村麻呂に擬せられており、藤原利仁伝を収めた『鞍馬蓋寺縁起』と坂上田村麻呂伝を収めた『清水寺縁起』の内容を合わせた作品と¹⁾言われている。

本稿では、國學院大學図書館所蔵『田村の草子』（以下、國學院本と略す）を翻刻し、他諸本との比較を通して、國學院本の本文の特徴を明らかにしていきたい。

はじめに、國學院本の書誌を示す。

〈請求番号〉 貴四二〇九〇四二二一

〈内題〉 ナシ

〈外題〉「たむら 上（下）」（左肩原装題簽）

〈残欠状況〉完本

〈保存状況〉良好

〈体裁〉袋綴（四つ目綴）

〈表紙〉萌黄色地牡丹唐草文様（裂・原装）

〈表紙寸法〉縦二九・六糎×横一八・四糎

〈見返し〉金地布目型押文様

〈料紙〉斐紙（金泥の下絵あり）

〈本文用字〉漢字平仮名交じり

〈一面行数〉十行（散らし書きあり）

〈字高〉約一八・五糎

〈丁数〉上32丁、中30丁、下33丁

（各巻首尾各1丁遊紙あり）

〈巻冊〉三冊

〈絵〉各巻9図（極彩色）

〈書入・貼紙〉ナシ

〈奥書〉ナシ

〈書写年代〉寛文・延宝頃

〈印記〉ナシ

〈その他〉箱書「田村麿鬼人退治図」（外箱）

「古竹老衲岳題鑿」（外箱内側）

「たむら一代記」（内箱）

※箱書の「古竹老衲岳」とは、江戸後期から明治時代の真宗大谷派大分専能寺住職・平野聞恵（1809～1893）のことである。⁽²⁾

二、『田村の草子』の諸本

次に、これまでに紹介された諸本の一覧を示す。⁽³⁾

*写本系

○慶應義塾大学・室町後期写本（外題「すゝかのさうし」。〔慶應古写本〕と略す）

一冊

※『室町時代物語大成 七』

○小野幸氏・室町後期写本（〔小野本〕と略す）

一冊（前半欠）

※『室町時代物語大成 補遺二』

○慶應義塾大学・万治三年写本

（内題「鈴鹿之物語之双紙上巻、鈴鹿山物語下巻」。〔万治本〕と略す）

二冊

※『神道物語集』（古典文庫・昭和50年）

○天理・（寛文）元禄頃）写本（内題「すゝかの物かたり」。〔天理写本〕と略す）

一帖

※『室町時代物語大成 七』

○大東急記念文庫・奈良絵本（外題「すゝか」。〔大東急本〕と略す）

五冊

※翻刻『室町時代物語集 一』（井上書房・昭和37年）

影印『大東急記念文庫善本叢刊中古・中世篇二 物語草子一』（汲古書院・平成16年）

○桜井慶二郎氏・寛永四年書写本

一冊【未見】

○天理図書館吉田文庫・写本（後半欠。外題「すゝかの物語」。〔吉田本〕と略す）

一冊【未見】

*流布本系

○〔寛永〕刊古活字版（彰考館）

二冊

※『室町時代物語大成 九』（〔寛永〕刊古活字版（天理図書館本）の校異）

○歴史民俗博物館・奈良絵本

三冊

※金子恵里子『専修国文』82（平成20年1月）

○〔寛永〕刊古活字版（天理図書館）

二冊

※『室町時代物語大成 九』

○正保三年杉田勘兵衛尉絵入版本（天理図書館・赤木文庫）

二冊【未見】

○正保三年無刊記後印本（天理図書館・東大國文）

二冊

※『室町時代物語集 一』（井上書房・昭和37年）

○書陵部・絵入写本（正保三年版の写し）

一冊【未見】

○〔寛文〕刊絵入版本（神宮文庫）

二冊【未見】

○アラス市立美術館（仏）・奈良絵本

五冊

※金子恵里子『専修国文』84（平成21年1月）

○スペインサーコレクション・奈良絵本

三帖【未見】

○台湾大学・絵巻

三軸

※『台湾大学国書資料集 一』《影印篇》・《翻刻篇》

○市古貞次氏・奈良絵本

五冊

※国文学研究資料館紙焼写真

『田村の草子』の諸本は、大きく写本系と流布本系（版本系）とに分けられる。両系統の大きな違いは、俊宗と鈴鹿

山に棲む鬼神・立烏帽子（鈴鹿御前）との婚姻の場面に見られる。写本系では、俊宗と鈴鹿御前は戦いを経て契りを交わすのに対して、流布本系では、鈴鹿御前は天女として描かれ、俊宗のもとに天下るといふ展開となっている。⁽⁴⁾

写本系の本文については、『室町時代物語大成』の解題で「二本ごとに、それぞれ異同があつて、系統を立てることは困難である」と言われている。⁽⁵⁾ 近時、安藤秀幸氏が写本系諸本の詳細な本文分析をされ、写本系諸本の分類、及び位置づけが明らかになった。安藤氏は、諸本間の異同箇所を取り上げて、写本系の本文は、大きく「高野本（稿者注・慶應古写本）・小野本」型と「万治本・吉田本」型にグループ分けができると結論付けられている。

大東急記念文庫本は、他の諸本に比して本文の異同が激しく、物語の展開も大幅に異なる等、特異な本文を有している。⁽⁶⁾ 安藤氏は「この東急本の本文がいかなる由来を持つかは現時点で不明であるが、本文の徴証から見て、独自に伝承された別系統本文ではなく、既に存在した『鈴鹿の物語』を改作したものであらうと思われる」と推定されている。

一方、流布本系は、写本系に比べて本文異同の幅は小さく、金子氏は「語句の追加、脱落などの比較的小さな異同がほとんどである」と指摘されている。⁽⁷⁾

國學院本は、写本系に分類される。ここで取り上げた先学諸氏による先行研究をふまえて、次節以降で國學院本の本文の特徴を明らかにしていきたい。

三、國學院本の特徴

今回、確認し得た他の諸本との比較から、國學院本の特徴として取り上げる箇所は、全部で四箇所ある。それぞれ

該当箇所本文を挙げながら、順を追って内容を確認していく。⁽⁸⁾

a 上巻冒頭・主人公の系譜

まずはじめは、物語の冒頭部である。

【本文1】

そもく我朝の開闢を尋ぬるに、国常立の尊より天神七代の御末、伊弉諾・伊弉冉の尊より二柱の御神、天の逆鉾を青海原にさし下ろし、引き上げ給ふ。その滴り凝り固まりて国土となる。地神五代の御はじめ、天照太神、天の岩戸を押し開きて、後日の光をもろともに、天兒屋根命、春日山に宮居し給ひしより二十二代の後胤、八代(ママ)の内大臣大織冠鎌足と降じ奉る。これは藤原の棟梁にしてまします。彼の鎌足より第二にあたり給ふ、ひこたちのすけ正五位の俊祐と申。彼の俊祐、越前の国の国司に成て下り給ふが、(以下略)

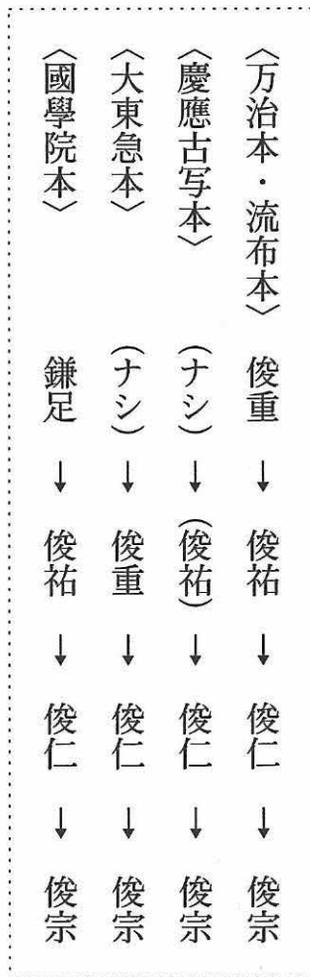
國學院本は、天地開闢から話を起こし、国常立尊や伊弉諾・伊弉冉二神、天の逆鉾による国土生成譚や天岩戸説話に言及している。特に国土生成や天岩戸説話に触れる諸本は、管見の限り今のところ他にない。

さらに、他の諸本と比較して大きく異なるのは、俊仁・俊宗の系譜の中で、大織冠・藤原鎌足が登場する点である。比較として天理写本の本文を挙げる。

【天理写本】

にほん、わかつてうに、代はしまりて、四百よさいに、なりにける。神の世七代は、さてをきぬ。にんわうの代と成ておほくのしやうくん、くけを、まもりたまふ。中にも、とししけの、しやうくんの、御子に、としゆうのしやうくんと、申けるは、ゑちせんの國、けたのこほりといふ所に、すみ侍りける。

天理写本では、傍線部のように、俊仁の祖父に当たる人物は「俊重」としている。他の諸本を見ても、ほとんど「俊重」で一致している。大東急本は、俊仁の祖父に当たる人物が設定されておらず、俊祐に当たる人物を「俊重」としている。慶應古写本では、「日ほんわかつてうに、としゆうと申、けんしのしやうくん一人おわします」とあり、系譜が「俊祐」から始まることや、俊祐を「源氏の將軍」とするなどの違いが見られる。各諸本の主人公の系譜を図示すると次のようになる。



國學院本が俊仁・俊宗の系譜の中で大織冠・藤原鎌足を登場させるのは、藤原氏の始祖である藤原鎌足を用いることで、俊仁・俊宗の主人公性を強調し、権威付けする意図があったと考える。

b 鈴鹿御前の蘇生

二つ目は、俊宗が鈴鹿御前を冥界から連れ戻す場面である。

俊宗は、寿命の尽きた鈴鹿御前を連れ戻すために冥界へ趣く。閻魔王は、最初は鈴鹿御前を娑婆世界へ戻すことを認めなかったが、俊宗が大とうれんの太刀を抜いて斬りかかり、帝釈堂に火をかけるなどして暴れ回ったため、洪々俊宗の要求に応じるようになった。しかし、鈴鹿御前の体は既に娑婆世界にはない。該当箇所を本文を挙げる。

【本文2】

獄卒申けるは、「鈴鹿は定業の者なり。体も今は候はず候。いかにしてかへすべし」と申ければ、筑紫日向の国に、同じ日の同じ時に生まれたる者なり。非業の死にの者に鈴鹿の魂を入れかへ給へば、姿日頃にかはりてわろし。又田村殿、閻魔王にのたまひけるは、「元の姿になして給はり候へ」と申されければ、第三の冥官を遣ひにて、帝釈に申給へば、「やがて医王ほうしやくの薬を与へ、元の姿より猶いつくしくつくりてかへし給ふ。三年の暇を給はりける。冥土の三年は娑婆の四十六年なり。さて、田村殿は冥土より鈴鹿を引き具し、娑婆へかへり、思ひのまゝにさかへ給ふ。伊勢や日向の物語とはこの事なり。

そこで、閻魔王の獄卒は、傍線部のように、「筑紫日向の国」の者と鈴鹿御前の魂を入れ替えることによつて娑婆世界へ返すことを提案する。結局、鈴鹿御前は娑婆世界へ戻り、元の姿を取り戻すことになる。

この場面を他の諸本と比較してみると、いくつか異同が確認できる。比較として小野本の本文を挙げる。

【小野本】

くしやうしんも、申けるは、かのおんな、まいり候て、もはや三ねんになりぬ。たむらこそ、ひこうのものにて候へは、からたも候へ。すゝかは、むまれかはり候はては、いかて、しやはへかへし候はんと、申ければ、さらは、かのによにとおなし日、むまれたりしによいんを、ことし廿七になり、あふみのくに、とうかいといふところにあるなり。いそぎ、それにとりかへて、かへすへしと、ありければ、(以下略)

小野本では、鈴鹿御前の魂と入れ替える相手を近江国の「とうかい」に住む二十七歳の女人としている。この箇所は、諸本によって女人の住む場所と年齢に異同が見られる。

〈慶應古写本〉	「あふみのくに とうかい」	年ナシ
〈万治本〉	「あふみのくに 東海道」	年「廿五」
〈天理写本〉	「あふみのくに とうかり」	年「廿七」
〈大東急本〉	記事ナシ	
〈古活字版(天理)〉	「みのゝ國 とふかい」	年ナシ

写本系諸本では、万治本が場所を「東海道」、年齢を二十五歳としており、異同が認められるものの、諸本間で大きな違いはないといえる。古活字版(天理本)では、場所を「とふかい」としており、写本系と近いといえるが、国は美濃としている。

先に見たように、國學院本は日向国の女人と魂を入れ替えたことになっており、管見の限り、他の諸本には見られない設定である。さらに、この記事の末尾にある「伊勢や日向物語とはこの事なり」との一文も注目に値する。文脈から判断すれば、伊勢国の鈴鹿御前と日向国の女人とを入れ替えたことを指していることがわかる。「この事なり」という表現から推測して、伊勢・日向両国に関連する説話が他にあるようにも思われるが、今のところ見出し得ていない。國學院本がどうして鈴鹿御前の魂を入れ替える相手に日向国の女人を選んだのかということと関連させて考察する必要があるだろう。

c 物語の終末部

三つ目は、俊宗と鈴鹿御前の後日譚、作品の終末部である。

【本文3】

鈴鹿の山をば正りん御前に譲り給ひて、御身は麓にしもものこせんと祝れ給ひて、今にたえせず。

さて、田村殿は我朝の魔王鬼神を平らげ給ひて、国の守りと成給ひて、つるには鈴鹿山の麓に神とあらはれ給ひて、田村の宮とて、今に諸人歩みを運び、渴仰す。有がたき例とかや。されば大とうれん・小とうれん・つもの、つき弓は、今に彼の田村の宮に納まりて有り。けんみやうれんは、鈴鹿の峰に伝はりて有り。

娑婆世界へ戻った鈴鹿御前は、娘の正りん御前に鈴鹿山を譲った後で鈴鹿山の麓に祀られ、程なく俊宗も鈴鹿山の麓に「田村の宮」として祀られる。『田村の草子』の終末部は、特に諸本間の異同が激しい。鈴鹿御前と俊宗が神と

して祀られるという記事を有する諸本に限ってみれば、大東急本と流布本系が挙げられる。しかしながら、両者とも國學院本とは内容が大きく異なる。まずは大東急本の本文を挙げる。

【大東急本】

されはとしむねのくはんのまき物にも、たいく天下のしやうくんは、かならずわかさいたんなり。これ佛神のけしんも、しめいをそむき、國をみたすともからは、いゑをほろほすのみならず、三あくるてんのこうをうけ、たしやうこうにいたるまで、成佛する事かたかるへし。

又すゝかのたてゑほしは、すゝかのこんけんといはゝれて、とうかいたうのしゆこ神となり、ゆきゝのたひ人の身にかはりてまもり給ふ。このみちをゆく人は、その身のさいなんをまぬかれ、ふつきゑいくわにさかふる事、ありかたき事ともなり。

これをもつておもふに、むかしは、とよあしはらのなかつ國、これ大日のほんこくなれば、そのなをとつて大日本國とかうす。又によらいの金けんにも、ふつほうとうせんと、のへられければ、あつまをもつてみなもとゝす。ねんくさいくに、ますくふつきはんしやうして、ふつほうしんたうの國となり、ゆみをふくろに入、つるきをはこにおさめて、目出度御代とそ成にける。

大東急本では、俊宗が神となったとする記述は見られないが、鈴鹿御前は「鈴鹿の権現」として祀られ、東海道の守護神となつたとしている。続けて流布本系諸本を代表して、古活字版（天理本）の本文を挙げる。

【古活字版（天理本）】

扱も、此大將軍は、観音のけしんにてまませは、衆生さいとの方へんに、かりに人間と、あらはれ給ふ。又すゝか御前は、ちくぶ嶋の、へんさい天女なるか、あつき、しやしんをたすけ、佛道に入給ふへきとて、さまざまに、へんけ給ふも、御じひふかき事なり。

さて末代のためしには、清水寺の御こんりう、大同二年にじやうじゆして、大同寺と申せしか、水のみなかみ清くして、なかれのすゑも、ひさかたの、空ものとかに、めくる日の、かけ清水の寺とし、あらためてなを此てらの、さかのうへなる、田村たうの、のきはの松のふかみとり、千代よろつよの、かけしめて、きせんくんしゆする事、佛法はんしやうの故なり。此さうし見たまはん人々は、いよく、くはんおんを、しんじ給ふへし。

流布本系では、俊宗は「観音の化身」、鈴鹿御前は「竹生島の弁才天女」としており、本地物の体裁をとっている。加えて、流布本系の終末部で注目されるのは、清水寺の建立に言及している点である。清水寺は坂上田村麻呂によって建立された寺である。作品中では、俊宗が坂上田村麻呂であるとは具体的に書かれてはいないが、この一文からも、俊宗が実在の坂上田村麻呂をモチーフとしていることがうかがえる。鈴木善幸氏は、『田村の草子』以前は、坂上田村麻呂を毘沙門天の化身とする説が一般的であり、観音の化身とするのは『田村の草子』が初見であると指摘されている。そして、化身が毘沙門天から観音へと変化したのは、清水寺の建立など、坂上田村麻呂の事績との関連によるものであると結論付けられている。⁹⁾

再び國學院本の本文に戻る。

【本文4】

又そはやの劍は一とせ西海の波濤にて不動明王と闘ひ給ひし時めしたる御鎧、彼のりやうしゆは富樫の家に代々に伝はり、今に有とかや。かゝるかうなるけんしんは前代も未だなし。又侍にも有がたし。

されば夫妻の御子もともに神となり、伊勢の国鈴鹿山の麓に跡を垂れ給ひて、天下の安穩を守り給ふなり。富樫の先祖の物語なり。

國學院本では、鈴鹿御前と俊宗が神として祀られたとする記事に続けて、俊宗が所持していた「そはやの劍」と鎧が代々「富樫の家」に伝わるという一文があり、そして物語を「富樫の先祖の物語なり」の一文で結んでいる。富樫氏に言及する例は、他の諸本にはなく、國學院本の独自記事である。

ここで富樫氏に言及する理由は、富樫氏の系譜にあると考える。『国史大辞典』によれば、富樫氏は「鎮守府將軍藤原利仁を始祖とする加賀斎藤氏の一流で、石川郡富樫郷（金沢市富樫町一帯）を本拠に在庁官人として成長した。家国から富樫介を名乗る」とある。¹⁰『尊卑分脈』をもとに、富樫氏の系図を簡略に示すと次のようになる。¹¹

利仁—叙用—吉信（加賀介）—忠頼（加賀介）—吉宗—宗助—家国（富樫介）—信家—（以下略）

『国史大辞典』や右に挙げた系図から分かるように、富樫氏の始祖は鎮守府將軍・藤原利仁である。『田村の草子』の前半の主人公・俊仁は、物語中ではつきりと言及されている訳ではないが、藤原利仁に擬せられていることから、國學院本は富樫氏の始祖の物語として捉えていたのではないかと考える。この一文から、國學院本の成立に富樫氏が

関係していた可能性も考えられるが、今のところこの一文の他に傍証となる根拠は見出せていない。

d 卷末の和歌

最後に四つ目は、卷末に置かれた和歌についてである。國學院本の卷末には、次の二首の和歌がある。

桜狩り雨は降りきぬ同じくは 濡るとも花の影に宿らん
夜とゝもに花の匂ひを思ひやる 心や峰に旅寝しつらん

この二首でもって物語を結ぶ諸本は他にはない。しかし、古活字版(彰考館本に限る)と歴史民俗博物館本には、卷末に次の和歌がある。

【古活字版(彰考館本)】

草も木もわかおほきみのくになれはいつくかおにのすみかおほ(ママ)のなるへき

【歴史民俗博物館蔵奈良絵本・台湾大学本】

草も木もわかおほきみの國なれはいつくかおにのすみかなるへき

両者は同じ和歌ではあるが、古活字版の下の句にやや本文の乱れがある。この和歌は、『太平記』卷十六「日本朝敵事」に紀朝雄の詠とある。¹²⁾ 和歌の意は、草も木も含めて、国土はすべて大君のものであるから、鬼の棲む場所はこ

の世の中にはないということになる。『田村の草子』は俊仁と俊宗による鬼神退治の物語であり、物語の展開と和歌の意とが一致している。

ここで再び國學院本に戻り、まずはそれぞれの和歌の出典を確認しておこう。
一首目の和歌は、『拾遺和歌集』所収の読人しらずの和歌が該当する。¹³⁾

【『拾遺和歌集』巻第一 春50】

だいしらず よみ人しらず

桜がり雨はふりきぬ同じくは濡るとも花の影にかくれむ

國學院本は傍線部の箇所を「影に宿らん」としており、異同が見られる。続いて、二首目の和歌の出典は、『千載和歌集』所収の仁和寺後入道覚性の和歌が該当する。¹⁴⁾

【『千載和歌集』巻第一 春歌上59】

夜思ニ山ノ花_ラといへる心を 仁和寺後入道法親王覚性

夜もすがら花のにほひを思ひやる心や峰にたびねしつらむ

【『今撰和歌集』春部17】

題知不知 御室

夜もすから花のにほひを思ひやる心や峰に旅ねしつらむ

この和歌でも國學院本には異同があり、傍線部の箇所は國學院本は「夜と、もに」としている。二首とも完全には一致しないものの、國學院本の出典とみて大過はないと思われる。

では、國學院本の二首の和歌が物語世界とどう関連しているのだろうか。國學院本の場合、先に挙げた古活字版(彰考館本)や歴史民俗博物館本の「草も木も」歌ほどはつきりとした引用の意図は見出せないように思われる。そこで少し想像をたくましくして、仮説を立ててみたい。まず、この二首に共通するのは、春の歌で、特に桜の情景が詠み込まれているということである。桜を詠んだ和歌であるということをもふまえて考えると、これは清水寺と関連があるのではないだろうか。清水寺は、古来桜の名所として名高い場所であり、『清水寺縁起絵巻』にも境内に桜が描かれている。¹⁵ また、『田村の草子』の流布本系諸本の中には、台湾大学本等のように、物語の終わり近くに清水寺の境内を描いた挿絵を置く諸本がある。¹⁶ その挿絵の中には、桜が描き込まれているのである。つまり、この二首は清水寺の桜を暗示しているのではないかと推測するのである。ただ、先に見たように國學院本の終局部には、坂上田村麻呂の清水寺建立に触れていない。しかしながら、坂上田村麻呂と清水寺、清水寺と桜の関係は、当時としては極々常識的なこととして定着していたものと思われる。國學院本は、そうしたイメージをふまえて、流布本系諸本が本文と挿絵によつて示した坂上田村麻呂と清水寺の関係を暗示するように桜を詠んだ和歌を引用したと考えるのである。

四、おわりに

以上、國學院本『田村の草子』の特徴として四箇所指摘した。今回は未見の諸本がいくつかあったので、今後は写本系・流布本系合わせて諸本全体を見渡し、本文流動の様相を分析する必要がある。そのためには、人名や地名、文

章表現など、細かく異同を拾っていくことが肝要であろう。また、今回取り上げた箇所については、それぞれ國學院本の本文の特徴として指摘するに留まり、本文がどういう過程を経て生成されたのか、さらに作品中でどう機能しているのかという点については、もう少し踏み込んだ考察が必要であると考ええる。こうした基礎作業を積み重ねた段階で、作品の生成過程や『酒吞童子』や『俵藤太物語』といった、いわゆる武家物と呼ばれる作品群との影響関係等、総合的な作品分析への道が開けるだろう。

注

(1) 『日本古典文学大辞典』「田村草子」項(福田晃執筆。岩波書店 昭和59年)、徳田和夫編『お伽草子事典』「田村の草子」項(渡辺匡一執筆。東京堂出版 平成14年) 参照。

(2) 『真宗人名辞典』(法蔵館 平成9年) 参照。

(3) 諸本一覽は、松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』三省堂 昭和57年)、『室町時代物語大成 七』諸本解説、安藤秀幸「『鈴鹿の物語』の諸本―本文系統の整理をめざして―」(『国語国文』80―5 平成23年5月)をもとに作成した。

本稿執筆中に、ここに示した一覽の他に、三種類あることを知った。

○石川透氏蔵奈良絵本(江戸前期写・『御伽草子 その世界』(勉誠出版 平成16年)に写真が掲載されている)

○寛文延宝頃写大型奈良絵本「たむら」(『東京古典会創立百周年記念古典籍大入札会目録』平成23年11月)

○寛文延宝頃写奈良絵巻「鈴鹿」(『東京古典会創立百周年記念古典籍大入札会目録』平成23年11月)

(4) 金子恵里子氏は、写本系に「鈴鹿」の名を冠する諸本が多く、流布本系には「田村」の名を冠する諸本が多いことをふまえて、それぞれ「鈴鹿系」「田村系」と名付けて分類されている。金子恵里子「歴史民俗博物館蔵「田村の草子」翻刻と解題」(『専修国文』82 平成20年1月) 参照。

- (5) 『室町時代物語大成 七』参照。
- (6) 『大東急記念文庫善本叢刊 物語草子二』解説(柴田芳成執筆)参照。
- (7) 前掲(4)金子恵里子論文参照。
- (8) 國學院本の引用に際して、私に仮名を漢字に改め、濁符・「」を施した。
- (9) 鈴木善幸「縁起・伝承をめぐる寺社と民衆の葛藤——清水寺縁起絵巻」における田村麻呂伝承の展開を中心に——『論集仏教土着』法蔵館 平成15年)
- (10) 『国史大辞典』10巻(吉川弘文館)
- (11) 『国史大系 尊卑分脈』(吉川弘文館)による。合わせて『石川県史 一』「第10章 一向一揆 第2節 富樫氏の分裂」(石川県 昭和2年)所収の系図を参照した。
- (12) 『太平記』卷十六「日本朝敵事」「草モ木モ我大君ノ国ナレバイツクカ鬼ノ棲ナルベキ 紀朝雄」(日本古典文学大系)
- (13) 『和歌文学大系32 拾遺和歌集』(明治書院 平成15年)による。
- (14) 『新日本古典文学大系10 千載和歌集』(岩波書店 平成5年)、『群書類従』第10輯参照。
- (15) 『続々日本絵巻大成 清水寺縁起・真如堂縁起』(中央公論社 平成6年)
高岸輝「清水寺縁起絵巻」の征夷大將軍——坂上田村麻呂と足利義植——(『大和文華』117 平成20年1月)参照。
- (16) 『台湾大学国書資料集 一 たむらのさうし』《影印篇》(自棲文庫 昭和51年)

『田村の草子』 翻刻

上

そもく我てうのかいひやくをたつぬるにくに

とこたちのみことより天神七たいの御すゑ

いさなきいさなミのみことより二はしらの

御神あまのさかほこをあほうなはらにさしお

ろしひきあげ給ふそのしたゝりこりかたまり

てこくとゝなる地神五代の御はしめ天照太神

あまのいは戸をゝしひらきて後日のひかりを

もろともにあまつこやねのみこと春日山に

宮るし給ひしより二十二代のこうゑん八代

の内大しんたいしよくはんかまたりとかうし

たてまつるこれハふちはらのとうりやうにし

てましますかのかまたりより第二にあたり

(2オ)

給ふひこ^(ママ)たちのすけしやう五ゑのとしゆふと

申かのとしゆふゑちせんの國のこくしに成

てくたり給ふかはるハはなのもとにて日を

くらし秋八月のまへにて夜をあかししいか

くハ^(ママ)けんをむねとして御心さまゆふにおは

しけるか御心にあふ人なくして十六の御年

よりあしたにむかへてハゆうへにをくりむか

へ給ふ北の御かた四百六十人なりかゝりけれハ

(2ウ)

一人の御子もましまさぬことをふかくなけきた

まふあるときとしゆふおほしめしけるハ我五十一

の春秋をおくりしもおもへハゆめなりたとひ

七八十のよハひをたもつとも二十年にハ

すきしいまいくほとあるへきそ一人の子なけ

れハ我いかにもなりてのちたれかハあとをと

ふへきとおほしめしかゝるゑなかにすめハ心

にかなふふさいなかるらんミやこへのほりしか

るへき人をもたゝたつねはやとおほしめし

て五条の御しよにおハしましけりころハなか

(3才)

月ちうしゆんのころなるにさかのゝかたへ出
 たまひて秋のなこりなれハよものこすにくさ
 むらのむしのねつまとひかぬるしかのねをき
 くにつけてもよろつものあハれにうちなか
 め給ふに身にしめとふく秋風につかハぬ
 おしのひとりねもわか身のうへとくハんし
 たまふ月もことさら名をえたるこよひなれ
 ハふけゆくそらをなかめ給ふにわかき女ハうの
 こゑにて

草むらになくむしのねをきくからに

(3ウ)

いとゝおもひやまさりゆくらん

とうちなかめつるこゑなつかしくおほしめし

てとしゆふ御返哥に

ほのくゝとあかしかたなるしのゝめに

たれともしらぬ人そおかしき

とゑいしつゝあやしくて見たまへハとしのほ
 と甘はかりなる女ハうのゆふにやさしくこの
 よの人ともおほえすたとへんかたなくうつく
 しきか露にうちしほれてたちたりとしゆふ
 御らんしてたとひいかなるものなりとも

(4才)

せんせのしゆくしうにこそとおほしめして御
 しよへくそくしかへり

給ひて

あさからす

御ちきり

にて

おはし

まし

ける

(4ウ)

(第一図)

ほとなく北の御かたたゝならすなり給ふとし
 ゆふ五十にあまり給ふまで御子もましまさ
 さるに御よろこひハかきりなし御さんしよ

つくるへきよし有けれハ北の御かたおほせあり
 けるハ我十月にハさんハすへからす三年とあ
 らん正月にさんハすへしさんしよのたかさ三
 十六丈につくるへしとおほせ有けれハ百八
 十ほんのはしらをたてゝ四百八十人のはんし
 やうをすくつて三とせかあひたにつくりたて
 ぬきたの御かたのたまひけるハ我さんしたらん

ところへ八日よりうちに人かよふへからすとて
 御身一人らうもんへのほり給ふとしゆふハ
 かたとき北の御かたみたまハぬをさへ戀し
 くおほしめすに七日かほとまたん事ひさし
 くおほしめしけるに七日にもなりけれハいま

(5才)

ハくるしからしとてろうもんへのほりた

まひて御らんすれハうちに小松三ほんさか
 木七ほんおひたりろうものうちハくハう
 ミやうかくやくとして日月地におちたるか
 ことしいかなる事にやとあやしミたまふな
 かさ三十てうハかりの大しやのきハめてう
 ろこけたかくせなかにハもろくの草木お
 ひたりかのもの三さいはかりなるおさあひ
 ものをかゝへてねふりゐたる日月とみえし
 ハふたつのまなこなり

(5ウ)

三十六丈の

たかき

うへなれハ

まわうなどのなやま

かしにて

(6ウ)

(6才)

かゝるすかた

を

けんする

にやと

あさ

ましく

て

をり

給ふ

(7才)

(第二回)

(7ウ・8才)

すてに八日にもなりぬれハ三さいはかりなる
 おさあひ人をいたきて北の御かたろうもんより
 おりたまふありしすかたよりもなをいつくし
 てのたまひけるハちゝのつくるなをこそよひ
 候へともこれハ日りうとつけてはんへる八日
 と申さんとき御らんし候ハゝていわうのくら

るにてましますへけれともたらすして七日

めに御らんしたるによりしやうくんのくらゐに

てましますへしこの子三さいと申さんときちゝ

ハしゝたまふへし七さいのとしはていわうより

(8ウ)

せんしをかうふるへし我ハこれゑちせん國

ますたのいけの大しやなるかしよ天のおほせ

にしたかひてかりにとのゝふさゑとなりぬ

いまハいとま申とてかきけすやうにうせに

けりとしゆふハかゝる大しやとみきゝながら

おもひわけたるかたもなしなミたにむせひ

ておはしけるかせめてなこりのかなしさにむ

まれて八日になり給ふわか君にむかひて

なんちか母ハいつかたへゆきつるそとゝひた

まへは天へゆひをさしかうとハかりのたまひ

(9才)

けるとしゆふハなけきながらとし月をゝくり

たまふほとにすてに三ねんにもなりぬれは

日りうとの八十二三ほとにみえ給ふとしゆふは

おもひまうけたることなれ八日りうとのに

御名こりおしくおほしめしけるかつるにはか

なくなり給ふさるほとに日りうとの七歳

と申に御は、のゆいこんのことくていわう

よりせんしくたりてあふミの國ミなれかハ

にくらミつくらのすけとてふたつのたい

しやありひんかしよりにしへゆく人をはミ

(9ウ)

くらふ事おひたゝし

いそぎ

これを

ほろほ

すへし

との

せんし

なり

(10オ)

(第三回)

(10ウ)

そのとき日りうとのなミたをなかしおほせける
 ハうかりけるわか身かなむまれて八日には、に
 はなれさて三さいにてち、にをくれまいらする
 また七さいにてかゝるせんしをかうふる事よ
 とのたまへハめのと申けるハきみのちゝにて
 わたらせ給ひしとしゆふハ五さいにてゑちせん
 のけいの津にてなかさ六丈の大しやをいたき
 ころし給ふされはしよ人したをふるとこそ
 うけ給ハリて候へ君ハ七さいにてましませは
 せんしなるもことハリなりこれこそせんそ

(11オ)

のみたらしとてつの、つき弓しんつうのかふ
 らやとりそへてまいらする日りうとの弓をし
 はりミ給ふにすこしもさハるところなし三
 百よきのくんひやうを給ハリてミなれかハへそ
 くたり給ふミちのほとりよりふちのそこを

見たまへハれう羅きんしうなかれけり日りう
 とのおほせけるハなかるゝたからハミなまわう
 なりよくにちうしたるものハマわうにをかさ
 るゝものなりとのたまへりさてふちのほとり
 にたちよりておほせけるハこれハみもすそか

(11ウ)

ハのそのなかれあまつこやねのみことのすゑ三
 十代のこうゑんとししけしやうくんの御子

正四位としゆふの子日りうとしてしやうねん

七さいなり十せんの君のおほせをかうふりて

いまこれにむかふたりいそきいてゝたいしやう

申せと有けれハしはらく有て水のおもてさハ

かしくなミ風あらくふきたてゝふたつの大

しやあらハれいてけれハ三百よきのくんひやう

ともそこのミくつと成にけりかゝるなかにも

日りうとのハすこしもおとろき給ハすして

(12オ)

日かすををくりかの大しやのいつるをいまやく

とまちたまふほとにあかしくらしはや六ねん

に成にけり日りうとの十三に成給ふあまり

のおもひにやしよ天にきせい申させたまふ

やうハ神ハ九せんわう八十せんのからゑなり

いかてかこのくにゝまします神たちわうゑ

にハそむき給ふへきや山ハさんしんこわう

とてまします河にすいしんとてましますこ

のかハにも水神とかましますさゝるへき此

川水上きらせて水ほしてたひ給へさなくは

(12ウ)

この國をさり給へとおほせられけれハかハかミ

きれミつもなしふちのそより三十ちやう

はかりの大しやふたつについてゝ申やうなんち

ハ我らかためにハおいなりあふミのミつうミ

にすむ大しやハ我ためにハあねなりなん

ちかはゝのますたのいけの大しやハわれらか

ためにハイもうとなり此世かいにとしをふる

こと二千五百年そかしにほんにも六十四年

すむなりなんちハわつか十三さい我らに
てきたいしてハいつくにすむへきやとて口

(13才)

よりほのほをふきいたすそのとき日りう殿
つのはつき弓にしんつうのかふらやうちつ
かひよつひきはなちたまへハ

ふたつの

大しや

いのちをとゝむる

こと

しさい

なし

(13ウ)

(第四図)

(14才)

かの大しやのきもとりてあふらになして

ミやこへのほりたまふ十六の御とししやうくん

のせんしをくたされとしひとのしやうくんと

そ申ける十七の御としある夕くれにゑんき

やうとしておはしけるかおしの一つかいある
を御らんしててうるいつはさたにもたか

ひのかたらひあるそかしなとや我にふさい

のえんのなかるらんとおほしめしてたつねた

まへハ藤ハらのちうなこんの御むすめたか

とをのひめ君ひしんときこえ給ふ御なをハ

(14ウ)

てるひの御せんと申けるとしひとこのよし

きゝたまひて文をかよハししのひてかよひ

給ふほとにこのひめ君ひしんの聞えまぢ(ママ)

てきさきにたち給ふとてたいりへまいりた

まふひめ君ハところならすくものうへの御す

まるも物うくおほしめしとしひとの御事のミ

なけきあかしくらしたまへハみかとあやしく

おほしめしてかの人をいつのくにへなかし給ふ

としひとむねんしこくにおほしめしてせた

のはしをわたり給ふとてはしけたをふミなら

(15才)

しとしひとはいまハミヤこになき身となるは
ひと、せみなれかハにてのくらミつくらのすけ
かたましるこのかハにそあるらんミヤこへのほ
りてあくしをせよ大しやハ七へんしやうのた

ましるのあるときくそとていつのくにへそ

くたり給ふさてミヤこにハミなれかハのあふ

らと成し大しやのきもよりおかしらいてき

大しやとなりて人をはミくらふ事かきりなし

たいりへはかせをめしてしつめられけれども

そのしるしなしこれハとしひとの御うらみと

(15ウ)

うらなひ申さるゝさらハとしひとをめしかへす

へきよしせんし有けれハ一もまいらすてるひ

のこせんのゆへとてかのひめ君をいつの國へ

くたし給ふとしひともとよりおほしめす事

なれハ引くしミヤこへのほり給ふとて又はし

けたをふミならしとしひとハおもひのまゝに

ありてミヤこへのほるなりいまよりあくしす

へからすとのたまへハまたもとのあふらと成

にけりかくてとしひとミヤこへのほりたまひ

御いはるを御こゝろのまゝにたもちめてた

(16才)

くあかしくらし

たまふ

ほとに

ひめ君

二人

いて

き

た

まふ

(16ウ)

(第五回)

(17才)

てうあひなのめならすあるとき北の御かたはし

ちかく出給ふおりふしあらしはけしくふきて

ミすふきあけけるに北の御かたを天にふきあけ
たてまつるとしひとにかくと申せハおとろき御

らんすれともめにみえぬ御かたきなれハちから
なしたゝはうせんとあきれ給ふせめてのこと

に神ほとけにきせい申させたまへともそのし

るしなけれハゆふけのうらをきかハやとおほ

しめして二てう大ミヤをひんかしへむかひて

おハしけれハあるこいゑのつまとのきハにおう

(17ウ)

ちとうはと二人有て申けるハなにこともせん

せのことゝといひなからとしひとのしやうくんのあ

りさまうらやましからす北の御かたゆへになかさ

れさせ給ひてなか一ねんにて御のほりありて

また三年めにハマわうにとられ給ふいたハし

さにあハれ我らかなかほとめてたきことハなし

おうちハ十八うは八十六のとしより八十三と

八十一までそひけるめてたさよとかたるまた

二てう大ミヤをのほりにとをり給へハわらん

へ三人つれて行けるかさきなるものゝいひける (18オ)

八日ほんにむかしよりゆミヤをとりてくのを

おさむるしやうくんも女はうをものにとられ

てなけき給ふおかしさよといひけれハなかな

るものゝいひけるハさなのたまひそかへにミゝ

石にくちといふそ六よくてんのまわうなどゝ

申もしをハマぬかれすほんふの御身として

いかてかせんこうをハしらせ給ふへししやう

らうひやうしをしくとしてあひへつりくお

(ママ)

にんけんのかなしミとすにほんハ天くまわう

おほけれハさやうのものこそとりつらんほんふ

(18ウ)

いかてかしり給ふへきといへハあとなるわらんへ

申けるハおにのとうりやうハあふミのくにか

まふかはらのあくしのたかまるかさなくハむ

つのくにのたに三山のあくらうわうかてん

くならハあたこ山のきやうくハうはうかひん

かし山なるさんせうはうそとりつらんと申

けれハとしひとこれをきゝたまひていそきあ

たこやまへおはしききやうくハうはうは

ましますかもの申さんとのたまへハいまゝてハ

ありともみえぬ一けん四めんのひかりたうこそ

(19才)

いてきたれそのえんにとし七十はかりなる

らうそこのまゆのけひさのうへまでかゝりた

るか戸をひきあけて

なにことを

(20ウ)

おほせら

れ候

そと申

され

けれ

は

(19ウ)

としひとおほせられけるハかやうのこと申に

つけておこかましき事にて候へともすきにし

きさらきのころつまをうしなひて候もし御

てしたちの中にもや候かとおほせけれハき

やうくハうハう申されけるハさやうのことハい

かてかてしともの中にもとるへきものは候

はすひんかし山さんせうハうかもとにもさる

事候ともうけ給ハリ候ハす御かへり候ハんミち

にふしきの候ハんするに御たつね候へそれに

こまかに申候ハんすると申されけれハいそき

かへり給ふミちに五ちやうハかりなるふし木あ

りくつのはなをもつてしたゝかにけていか

にやふしきのものに物とハんとのたまへは

一時はかりゆるきて二ちやうほとくひをもち

あけて申けるハ人にものとふとていまたつら

けられたる事なしなんちハ我ためにハおい

なりなんちか母ハ我ためにハいもうとなり御

(第六回)

(20才)

身つまをうしなひて戀ちにまよふむさん

さにをしへたてまつらんとてきたるなりその
人ハいまた天へものほらすたうとへもわたら

(21オ)

す日ほんのうちむつの國たに三山のあくらう

わうといふおにのとりたるなりけふより六十

四日といはんときかならすあひ給ふへしくらま

のひしやもんによく／＼きせい申すへしたもん

の御はからひにておにをうち給ふへしとのゝ

母ますたのいけのぬしハにんかいにしやうを

うけてはやしやたうのくけんをまぬかれたり

わか身ハこうゐんいまたさかりにてしやしん

つきせすくるしミありかへす／＼も我ためにせん

こんをなしてくけんをすくひしやたうをた

(21ウ)

すけ給へとてかきけすやうにうせにけりさて

としひとハかへり給ひて七日しやうしんして

御身をきよめくらまへまいり給ひてな無き

ミやうてうらいたもん天ねかハくハとし人か

ふさいのかたきをうたせてたひ給へときせ

いありけれハ七日と申とらの一天にたもん天

つるきを給はりてこれにてうつへしと御

むさうあり

けれ

は

(第七図)

(22ウ)

うつゝにまくらにたちてありとしひとつるき

をたまはりてめてたくけかうあり人をいさ

なひたまふにあハちの四郎三条のさいしやう

三てうの九内のきやう二てうのうちうなこんミ

のゝせんしハかりこそ十三に成給ふひめ君を

うしなひたまふのこりハとしひとをはしめとし

て九人ハ女はうをまわうにとられてたつねた

まふありとたにしりたらハいかなるちいろの

(22オ)

そこなりともなつかたつねさるへきとてむつ
のくにたに二やまへそくたり給ふかくて日か

(23オ)

すをふるほとにはかせのこほりたむらのかう

にそつき給ふ七月けしゆんのことなるにしつ

のめかなるこをひきならしけるを御らんして

とし人こそうの人にて御子のあるへき事さと

りたまひてなんによのならひなれハ一夜の

なさけをかけ給ふとしひとのたまひけるハ

これよりたに三山へハいかほとあるそとゝひ

たまへハしつめ申けるハこれよりたに三山

へハ十四五りも候はん七りかほとハきしんのす

みかとなりてさらく人かよふ事候ハすと申す

(23ウ)

としひと思ひまうけたることなれハなとかゆか

さらんとおほしめしけるまたとしひとおほせ

られけるハもし子といふものあらハこれをミ

せよとてうハさしのかふらやひとつぬきかの

しつめにしたひにけりかくてかのたに三山
へおはするほとにあくろうわうかたちのあ

たりにつき給ふくろかねのつるちを四十五町

につき四八うをつよくかためいるへきやうハな

かりけりひんかしのもんをミ給へハ十四五は

かりなるひめもんのほとりにありいかさままわう (24オ)

なるらんとつるきをぬきたまへハかのひめ申

けるハ我ハこれミやこのものにて候ちゝハミ

のゝせんしと申す人なり十三のとしよりお

にゝとられてことし三ねんかあひたつるかい

の女となつけられてもんをまほり候ミやこ

の人とうけたまはり候へハ御なつかしくこそ候へ

ミちにまよハせたまひてこれまで御いり

候はゝいそきかへらせたまへこれハおにのすミ

かにて候おにのかへらぬまにとく御かへり候

へとてなミたにむせひておハしけるさてお

(24ウ)

にハいつくに候そととひたまへハゑちせんへ行
候あすのむまのときかへり候へしとのたまへハ
またとし人このもんのうちへハいかにして入候
そとゝひ給ふこれにいこくりうと申てりうの
こまにのりてひとりうちへいり候へハもんを
ひらきミなうちへいり候と申さるゝさてミのゝ
せんしハひめ君を御らんしてしかるへき仏神の
御はからひにやとよろこひ給ふ事かきりなし
さてとし人かのりうにのりもんのうちへ

いらんとしたまへハ

(25才)

(第八図)

(25ウ・26才)

もんのうちへハいらすおにゆきけるかたへと
飛ゆかんとするそのときとし人つるきをぬきて
のたまひけるハなんちハちくしやうといへ
ともりうハむまの中のわうたりいのちおし
くハもんのうちへいるへしとのたまへはこと

はもおはらさるにしやうのうちへそとひいり
けるさてとし人ハもんをひらかんとしたまへハ
大はんしやくをかさねたるもかくやとおほえて
すこしもはたらかすそのときくらまのかたを
ふしおかミなむたもん天ちからをあハせて

(26ウ)

たひたまへときねん有けれハとひらハさつ
とあきにけりそのとき人々うちへ入御らん
すれハしんでんのミなミおもてに女はう五
六十人のこゑしてふるさとの事かたりな
きかなしむあハれさ申ハかりなしうちへい
りてみたまへハ人々の北のかたおはしける
中にも二条のさいしやうの北のかたおとゝい
まておハしけるかはやおにのゑしきとなり
たまふよしをかたりたまへハさいしやうとの
きゝもあへすかなしミ給ふ事かきりなし御
心のうちをしはかられてあハれなりかやうの

(27才)

ことゝしりたらハたつねさらましとなけき

たまふこの人々のなかにもとしひとのきたの

御かたハみえたまハす二条のちうなこんのきた

のかたおほせられけるはこれよりおくにこそ

女はうの御こゑかすかにきこえ候との給へハ

としひとおくへいりて御らんすれハわたり

とのゝひんかしにそひて御しよありすたれ

のきハへよりてきゝたまへハ女はうのこゑ

してなむきふねのミやうしんくらまの大ひ

たもん天わうねかハくハミやこにとゝめをきし

二人のひめ君としひとにいま一度あハせてた

ひたまへさなくハおにのゑしきとなさすし

ていのちをめしこしやうをたすけさせた

まへといのる我北の御かたときゝたまひて

たとひまゑんのへんけなりともとおほしめし

すたれをうちあけ見たまへハ御めをたかひ

にミあハせたまひてこれハいかなる御こと

そやうれしくもこの世にてみたてまつる物

かなあすハおにのゑしきとなるへきにいてい

まハ一すちにこしやうほたいをいのりつるにわ

か身の事ハさてをきぬ御身さへましゝていか

に成たまひ候ハん事こそかなしけれいそきお

にのなきまにかへらせ

給へとて

御袖をかほにあて

さめく

と

なき

給ふ

(第九回)

(29才)

しはらくありてさても二人のひめきミハけ

なりけに候やらんとてかたくなミたにむせひ

(28才)

(28ウ)

たまふとしひとおほせられけるハこれまで
 きたり候事いかにも成たまひ候ハ、ともに露
 ともきえ候ハんためなりいのちのうちにいけん
 さん申こそうれしく候へいかてかかへり候
 へきとおほせられけりまたおにのかへり候
 ときしるしか候やらんとのたまへハおにのき
 たるときハくまなきそらもかきくもりしや
 ちくの雨ふり風さハかしく物かたりのこゑ
 七里ハきこえ候とのたまへハそのときとしひと
 つのゝつき弓にしんつうのかふらやとりそ
 へてまち給ふ九人の人々もおもひくゝにこ
 しらへていまやくゝとまち給ふすてにその
 夜もあけぬれハそらかきくもりしやちくの雨
 ふりかせさハかしくもくのうへにものかたり
 のこゑきこえけりあくらうわうハ大をんあけ
 て申けるハいかにやくゝもんまほりの女は
 なきかちこくりうハいつくにあるそいかな

(29ウ)

るものなれハ我らかなきまにあとへきたるそ
 たゝにらミころせとておに十人して一千八
 百のまなこをいたしてにらミけり秋のいな
 つまらいてんななどのことくなり十人かたくゝ
 八人ハかのまなこにおとろきてふし給ふ今ハ
 としひとゝミのゝせんしハかりたち給ふその
 ときとしひとくらまのかたをふしおかミなむ
 きミやうてうらいたもん天わうねかハくハ
 とし人かまなこにけんしたまへときねん有
 けれハおにの一千八百のまなこたゝ二十にそ
 なりにけりそのときおにともちのなミたを
 なかしけりとしひとけんどんつるきをな
 けたまへハそらへまひあかりておに十人の
 くひをうちおとしけりこれをとりあつめた
 きゝをつミはいとなしたまふ

(30ウ)

(31オ)

中

かくてとりをきたりし京ゐなかの女はう以上
六十人ありあるひは三ねん四年五ねん有つる
をミなほんこくへかへしたまへハよろこひ申
事かきりなしかゝる中にも二条のさいしやう

とのゝ御心のうちおもひやるかたましまさすい
まひとしほの御思ひそまさりけるさてとし

ひとハミやこへのほりたまひて思ひのまゝに
あかしくらしたまふかひめ君ハ二人ましませ
ともなんしハ一人もいてき給ハすわれ天下の
大しやうくんをもちても我まで十一代なるに

(2オ)

としひとかのちふけのミちたえなんことよと
てなけき給ふところにひとゝせあくらうわう
せめ給ひしとき一夜のなさけをかけ給ふしつ
のめかはらにわか君一人おハしけりはや七さい
に成給ふ御名をハふせりとのとそ申けるかあ

るときふせりと母にむかひていかにや我に
ちゝといふ人ハ候ハぬやとゝひたまへはたつね
てなにゝすへきと有けれハかさねてのたまひ
けるハなとかしり給ハさるへき天なくしてあめ
ふらす地なくしてハ草おひすそのうへ一天の

(2ウ)

けうしゆしやくそんもしやうほん大わうをちゝ
としまやふにんをはゝとしてこそ人かいに
むまれたまひて十九にてわうくうを出給ひ
三十一にてしやうとうし四十九年のあひた御
せつほうをときしゆしやうをけとしはつた
いかのほとりしやらさうしゆの木のもとにて
かりにねはんをしめし給ふかゝるたつときほ
とけたにもちゝはゝおはしますにいはんや
ほんふの身としていかてかちゝなかるへきを
しへたまへとのたまへハ我身ゆふくんゆふ女の
身ならハこそたれとも申さめあさましきしつ

(3オ)

のめなれハいふへきたよりハなけれともなん
 ちははゝのかたみハこれよりひんかしあひほ
 らさんのきたにすぎ四ほんのしたにあるそ
 とをしへたまへハをしへのことくにゆきうは
 さしのかふらや一すちほりいたすこれこそ一
 とせあくらうわうせめたまひしとしひとの
 しやうくんの御やなり御身のちゝハとしひと

よとをしへ

けれハ

(3ウ)

(第一図)

ふせりとの大きによろこひたまひてはゝにハ
 七さいまでそひたてまつり候へハおもひをく事
 なしちゝといふ人なつかしく候へハいとま申候
 いのち候ハゝいかさままたまいるへしとて二月
 なたむらのこうをいてゝ廿日のミちを三日
 にはしりつき給ふとしひとのしやうくんおり

(4オ)

ふしものほとりにたゝすミておはします
 とし人ハマりをけたまふにまかきのほかへま
 りちりけるをふせりとのかとよりうちへけ
 いれ給ふとし人あやしくおほしめし御まへの

(4ウ)

人々をめしよせていかなるものそと御たつね
 ありけれハはゝのいひつる事ともを有のまゝ
 にのたまへハさてハ子にてもあるらめとてあ
 たらしく御しよをたてゝそをきたてまつり
 給ふそのゝちかふらやをミせたてまつりけれハ
 いよゝうたかふところなく我御子なりとて
 御名をかへられてあさひとのそ申けるあ
 さ日とのつねにめしける小袖しやうそくのも
 すそぬれけるいかなる事そと人をつけて
 ミせられけれハかもかハかつらかハへゆきてハあ
 なたこなたへとひわたり給ふかへりにハ七
 けんのむまやをとひこへて我御しよへかへり

(5オ)

給ふとぞ申ける有ときあさ日との父の御まへ
にてはんをきこしめしける御きしよくを御覽
せんかためにかふらや一すちつかんてひたり
のまなこにあてゝはなしたまへハ

はしにて

はさミ

とめたまひ

けり

(5ウ)

(第二回)

いよくうれしくおほしめしたまた御なをかへ
わかなをつけんとして日りうとのとぞ申ける
なをもためしてミんとおほしめしいまたお
きさせたまハぬさきにつるきをぬきてなけ
かけたまへハ日りうとのいかにやつるきたし
かにきゝたまへ我まことにくんけのあとをつ
くましきならハたちまちにいのちをとるへ

ししやうくんのあとをつくへき身ならハ我

たもとへきたれとのたまへハひたりのたもとへ
いりぬかくのこどくの人なれハ十三にてけん

(6ウ)

ふくしいなせの五郎さかのうへのとしむねとぞ
申けるつなかぬ月日なれハとしひと六十五に成
たまふある夕くれにこしかた行すゑのこと

おほしめしつゝくるに我すてにてんかのしやう

くんとしてとしひさしくたちぬなにごとか

しをきてまつたいのこうきにもとゝめんと

(6オ)

つらくあんし給ふに日本ハわつかせうこく
そかしたいたうをしたかへにほんのたくひに
せんこれそまつたいのつたへになるへしとお
ほしめしてひまをうかゝひてうちのくハんは

(7オ)

くミつたかをもつてそうもん有けれハきう
せんの家にむまれててんかをまほりたて
まつる事としひさしくなりぬいのちをすてゝ

名をわかつてうにとゝめんとそんし候御ゆるさ
 れをかうふりたく候しせん御ようのこと候ハゝ
 としむねにおほせつけられ候へと申されけれ
 ハまことに思ひたゝん事をハいかてかとゝむ
 へきとせんしありけれハとしひとよろこひた
 まひてちんせいのはかたのつにくたり十萬
 よきのひやうせんをとゝのへてたいたうへわ

(7ウ)

ふせきかたし日本ハせうこくなれともはか
 りことかしくくたやすくうせかたしとてけ
 いくハおしやうと申たつとき人やかてたん
 をかさりとしひとをてうふくす七せんたひ
 の大しやうふとうミやうわうをかけならへて
 おこなひ給ふふとうミやうわうハこんかうとう
 しを引くして

としひとのふねに

むかひ

たまへハ

(8ウ)

たらんとし給へハとしむねもともにわたるへし
 とおほせられけれハなんちハせんたうの御
 大事あらハ御ようにたつへしとてミやこへ
 のほせ給ふさてとしひとハ日ほんのしやう
 くんかたいたうへわたらんにまつしるしをミ
 せんとてくハいんをむすひてたいたうへな
 けたまふたいたうにハ七日七夜火の雨ふり
 けれハさハく事かきりなしれいもんをひいて
 うらなひけれハにほんのしやうくんたうをし
 たかへんとてきたるよしを申さらハほんふ

としひとこれを御らんして

ものへのかといてに

へんけのものこそ

出きたれ

とて

さんくゝに

そ

(8オ)

たゝかひ

たまふ

(9才)

(第二回)

(9ウ・10才)

としひとのつるきのひかりハまさりふとうの

つるきハひかりおとりけり是ときふとうのお

ほせにハいかにやこんかうやしや日ほんへ行

てくらまのひしやもんに申さんするやうは

ミやうわうこそとし人にまけ候ハんとおほえ

候としひとのいりきをおとしてたひ給へと申

されけれハたもんでんの返事もしたまハす

いよくとしひとのちからまさりてみえたまふ

いまハかなハしとやおほしけんかたゝハこれ

にてふせきたまへ我ハにほんへゆきたもん

(10ウ)

天に申さんとてふとうハくらまへゆき給ひ

たもんでんに申させ給ふやうハ此たひとし

ひとにまけ候ハゝたいさうかいのふつりきすた

りてほんふのしんゝいとゝたえてしゆしやう

三つにかへり候ハん事うたかひなしねかかくハ

かいりきをおとしたまへ申させたまへハた

もん返事にハ我くにハふつほうのりしやう

あらたにしてふつたいのめくミとなりいか

てか我くにのけんしんていわうの御まほりを

うしなふへきかとのたまふふとうかさねて申

(11才)

給ふやうとしひとのかハりに我日ほんをしゆ

こ申候ハんとおほせられけれハさらハうたせ

たまへと有けれハふとうよろこひかへりた

まひてたゝかひ給ふふとうのつるきハひか

りまさりとしひとのつるきハひかりをとりて

三つにおれりりやうせんにまひあかりと

し人かなハしとおほしめしミやうわうの舟に

のりうつりくちおしやとてふとうのこんけ

いをとつてふなハたにをしつけうミになけ

入給ふさてふとうのつるきまひあかりてと

(11ウ)

しひとのくひをとりおとすふとうハかのく
ひをとりてたうとへおハしぬけいくハおし
やうの五七日おこなハれけるたんのうへにそ
をかれけるそのちとしひとのかはた(ママ)をふねに

のせ八えのしほちをこきすきてはかたの津
にそつきにけるとしむねにこのよし申けれハ
いそきはかたにくたり給ひむなしきからた
をとふらひなくくミヤこへのほり給ふなけ
きながら年月をくりにたまふほとにていわう
よりのせんしにハやまとのくにならさか山に

(12オ)

かなつふてといふへんけのものありミヤこへ
のほるねんく御もつをうハひとつるいそき
たいちあるへしとせんしなりとしむねうけ
たまはりて五百よきのせいにてならさかへこそ
むかハれけれう羅きんしういろくのよき物

をそろへてかくうちたるなかもちかせならさ
かやまにひろけほしかなつふてをいまやくと
まち給ふや有てたけ五ちやうハかりなる
ほうしまかふらたかくほうほねあれたるかい
にも人にたかひたるかたかきところのほ

(12ウ)

り申けるハあらめつらしやいかなるねんく御
もつをもこの山にてハつミかくしてこそとを
るにかやうにするハほうしをたふらかさんとの
けつかうかこの山に五六ねんかほと有つれ
ともかやうにものをかくさすあらハなること
なしたとひいかなる御もつなりともはつお
をまいらせよと申けれハとしむねきこしめし
御もつハおほやけのものいのちハわたくし
のものなりいのちあらんかきりハいかてかたら
れ候へきとのたまへハきくわいなるくハしやか
いひことかないとはかることくしとハ思へとも

(13オ)

くハしやかふけいにくけれハうけてみよと
 いふまゝに三百つふてをなけてかくるかねのかす
 ハ一千八百りやうつのゝかすハ六十なり心から
 くハしやかいのちうせん事こそふひんなれと
 のゝしりけるとしむねハすこしもさハかすし
 てあふきを

とつて

うち

おとす

(第四回)

かなつふてこハいかに三らつふてハとるとも
 二らつふてハよもとらしかねのかすハ三千七百
 りやうつのハ七百五十ありたゝいまいのちを
 とらんうたかひなしとてなけかけたるとし
 むねハすこしもおとろき給ハすふちをもつて
 うちおとしたまふこれもすてにとあれぬ又

太郎つふてをとりいたし申けるハかねのかす

ハ五千三百りやうつのハ二千八百なりたうと
 てんちくわかてうにて八百年のとしをふる此
 山にも五六年そくはくのさいほうをとりた

(14ウ)

(13ウ)

るもこのつふてゆへなりあふミのミつうミか七
 度山となるともこのつふてにおひてハふかく
 ハゆめくあるへからすうけてみよといふまゝ
 にゆんてのあしをめてへふミめてのあしを
 ゆんてへふミひたりの手にてハめてのひさを
 つよくをして右のひちをつよくかゝけてこれを
 かきりと思ハしたためらひてなけかゝるまこと
 にかつちのとうをんになりてとうさいを
 うしなふかことし五百よきのふしともこのひ
 きにおとろきミなくひれふしぬとしむねハ

(15オ)

(14オ)

そらをなりまハリてかゝるところをあふミの
 ハすこしもさハき給ハすつふて十二日かあいた

はなにてけおとしたまふそのゝちせけんもと
 のことくになりにつれハつふてハミなくとら
 れてちからなき有さまにて申けるハくハ

しやかつらたましるまなこさし大かた人にか
 ハりたるとおもひしにあんにもたかハすとのゝ
 しりけりとしむねのたまひけるハいかにやそ
 れの御つふてのてからハ見申これもさつとハ
 なけれともたひくゝにそうてんするなりけん

(15ウ)

さんにいれんとてつのゝつき弓にしんつうのか
 ふうらやうちつかひよつひきはなちたまへハ
 かなつふてかひたりのミゝのきハ三すんハかり
 のきてたちたり山をはしれともはなれすう
 ミにいれともぬけすあまりのたえかたさに七
 日と申にしむねの御まへにまいりて申ける
 ハいかなる人のいるやも十ちやうハかりかひゝ
 くやらんとミな人申けるかこれハ十ちやう
 はかりこそひらけとのゝいたまひけるやハ一

日ならず二日ならずけふ七日になれともひらき (16オ)

もやますけふよりしてあくしをとゝまるへし
 とたいしやう申せはそのときちすちのなハ
 をつけて五百よきか中^(ママ)にけたてゝあハたくち
 よりきやうへそうもん有けれハちうせよとの
 せんしにて三条かハラにてちうせられけり
 さてとしむねハ十六の御としよりかのほうひに
 とてむまれ給ふさいしよむつのくにはかせ
 のこほりくいせのこほりくいせのしやうたむら
 のかうを給はりてやかてしやうくんのせんし
 をくたされたむらのしやうくんとそ申ける

(16ウ)

(第五回)

かくて日かすをふるほとにまたていわうより
 のせんしありいせのくにすゝか山にたてゑほ
 しとてけしやうのものありミやこへまいるね

(17オ)

むく御もつをとゝむる事おひたゝしこれを

うしなひ申せとのせんしにて三百よきのくん

ひやうをたまハリすゝかへこそくたられけれ

かの山におハして木のもとかやのもといたらぬ

ところなくさかし給へともさりぬへきしるしも

なけれハかくてあかしくらし一月二月すきぬれ

ともさらに御らんし出すこともなしすてにそ

(17ウ)

のとしもくれゆけハたむらとのゝたまひけるハい

かゝすへき人々これにて月日をゝくりてもか

ひなしミやこへまいる御もつをとらさらんに

こそこの山にあるかひもあらめ四ハうをかため

たまへともミゆるかたきもあらされハ御もつハ

とられなからいつをこしてかおハすへきかたゝ

ハミやこへのほり給ひてこのよしそうもん

あるへしとしむねにおひてハたてゑほしかす

かたをミスハなかゝにかへるへからすきうせん

のいゑにむまれしやうくんのせんしをたまハリ

(18オ)

なからかたかきをうちえぬ事ちからなしせめ

てすかたをミスしてミやこへのほりてハなに

と申へきたとひたしやうくハうハふるともたて

ゑほしかすかたをミスハこの山にかハねをさら

すへしとて三百よきのせいをハかへし給ひて

たゝ一人とゝまり給ふさらぬたに秋ハ山さと

物うきにしんせきたえたところにたゝひとり

すミたまふにつまこひかぬるしかのねとをく

きこえ山かせはけしくふき松吹風御身にしめ

ハたひのあハれもいまひとしほまさりけるかく

(18ウ)

てよもあけゝれハふかきたにゝくたりたまひて

御身をすゝきたかきところのほり四ハう

をふしおかミたまひてなむてんせう太神そう

して日本國中の大小のしんきミやうとうを

はしめほんてんたいしやくしたい天わうこの

山のさんしんこわうもあハれミたまひたて

ゑほしかすかたをミせてたひたまへとふかく

きせいをめされたかきミねにのほりみ給へハ
ほそきミちありうれしくおほしめしひんかし
へむかひてあゆミおはしけれハこのほとみえた

(19才)

りしこさゝわらありふしきとおほしめして
なをさるへゆきて御らんすれハ地にハこん

くゝるりをしきたるつくりミちありなをくゝ
ゆきたまへハすいしやうのことくなる池あり
しやうわうしやくひやくこくのれんけおひた
りかのいけにしろかねのそりはしにこかねの
きぼうしゆすへたりはしをわたりてみた

まへハいろくゝのはなさきミたれたりきゝやう
かるかやわれもかうしをんりんとうをミるへし
つたあさかほきりうすゝきくすかつらのすほ

(19ウ)

をやりてうへたりうちへいりてみたまへハこ
かねのいさをたてすなこに四ハうに四き
をあらハしまつひんかしをミたまへハせい

やうの春のけしきとおほしくてかすミたな

ひきねのひの小松ひきうへてちよをこめたる
まかきの竹にうくひすさへつりやうはいたう
りのはなのいろうちふく風に匂ひをましきし
のあをやきいとミたれ色くゝかすをつくしたり
さてミなミハ夏のけしきとうちみえてつくし山
ふきうつろひて春のなこりにちるはなのあをは

(20才)

ましりのおそさくらいけのふちなミ咲ミたれ山
ほとゝきすをとつれてぬまのあやめやまとも草
かけひの水もたえくゝになられひさしくみえわた
り木すゑすゝしきせミのこゑおりからにてやお
もしろしにしおもてハひこほし七夕あまのかハ
露けき秋ハきまさりくさしかの鳴ねもまとを
にてまくらにすたくきりくゝす草むらことに
なく虫の秋ふくかせも身にシミて色つく山の
けしきまで秋のもなかとおほえたり北ハ冬かと
うちみえてミねにしら雪ふりつもりあられ玉

(20ウ)

ちる冬の夜につかハぬをしのうきねにハ夢も

むすハぬこゝちしてまかきのうちのしらきくの

うつろふ色もためしありその中につくりたる

御しよ心もこと葉もをよハすけたうつはりたる

木しらかねこかねをのへたりひハたにもあらず

かハラにてもなしわしのはたかのはきりう

なかくろをもつて四十二けんをふきたりしろ

かねをのへてかへをはりこかねをのへてしやうし

をはりきよりやうたまのゆかにハにしきのし

とねをしきミスかけわたし七えのひやうふ八え

(21オ)

のきちやうをかけられたりそのうちに女ハう三

十人はかりすこ六こなとうちらんこひろひて

あそふこの中にもたて急ほしとおほしきはな

かりけり

しやうしのうちにハ

わかき女はう十四五人

くハけん

して

あそひ

給ふ

(21ウ)

(第六回)

(22オ)

なをおくをみたまへハきちやうのうちに十五六

はかりなる女はうふちかさねの七つひとへにく

れなるのはかまきてる給ふそはにかうけつの

ふくろにこと入てたてたれたりにしきのふく

ろにひわ入てたて給ふまことにあたりもかゝや

くはかりなり此世の人とおほえす廿二さうの

かたちをそなへひかるほとなりたむらとのゝ御

心のうちにハいかなるつみのむくひにてかゝるう

つくしき人をかたきにうけつらんいかなるけしん

の人なりとも一夜のなさけをかけるハかゝるしん (22ウ)

せきたえたところなりともなとか年月をも

をくらさるへきとおほしめしけるか御心を引かへ

ていや／＼かやうに心よやくしてハかなふなし

たゝからめとりてけきりんをもやすめたてま

つらんとおほしめしてすゝか御せん御心をす

ましておはしけるところへつるきをなけかけ

たまふすゝかハいつのひまにかちかひ給ひけん

かミをからわにきつとゆひあけきこゆるたて

ゑほしをまゆはんひつこみこんりんしやう

のひたゝれにはんこしやうのよろひに上おひ

しめ三たい九けんのかてをさししやうこんひ

れいのすねあてにちけんとうみやうのかたな

をさし大とうれんとて三しやく一すんのつる

きをぬきて

うへよしたよと

二とき

はかり

たゝ

かひ

ける

(23ウ)

(第七図)

(24オ)

さるほとにつるにそはやハマけてねすみと

なりていらんとすれハ大とうれんねこと成

ておひかへすきしとなりていらんとすれは

たかとなりておひかへすほむらと成ていらん

とすれハ水となりてけしにけり竹のはやし

となりていらんとすれハかまとなりてかりを

とすそのときすゝかこせんおほせられけるハ

いかほとつるきにほねおらせ給ふともこの山

にてわらハをうち給ハん事たしやうくハうハ

ふるともあるへからすとのハなんしの御身なれ

(24ウ)

ともたゝそハやのつるきはかりこそもたせた

まひて候へわらハゝ女はうの身なれとも三つの

つるきをもちて候大とうれん小とうれんけん

ミやうれんとて候そやとのをうちたてまつらん

とおもハ、大とうれんをそハやとあハせていま

ふたつのつるきをもつてうちたてまつらん事

かミすち一すちきるよりもやすかるへしミへし

と思は、この三とせかあひたのことくかくるへし

さりなから心をつくし給ふかいたハしきにあた

りハかりをみえたてまつりぬ御心のうちハはし

(25才)

めよりしりはんへりぬまつわらハを御らんして

おほしめしつるハいかなるむくひにかかゝるものを

かたきにうけつらんかりそめのなさけもあらハ

なとかとし月をもおくらさるへきとおほしめし

つるかまたしやけんの心いてきかくてハかなふ

ましうちてもからめてもミやこへのほりて

いわうのけんさんにいるへしとおほしめしてつ

るきをなけたまひしなりとのハとしひとの

しやうくんのまわうをせめにむつの國へくたり

たまひしとき一夜のなさけをかけ給ひしつ

(25ウ)

のめかはらにやとり七さいにてミやこへのほり

たまひしときあらハれわかつまにさためたてま

つらはやとおもひしかともうちすきぬるなから

せかいを見わたせともわかふさいになるへき

人もなしむつのくにきり山といふたけに大

たけとてまわうのものはんへるかこの三とせ

かほと文をかよハし候へとも返事もせずなに

かハくるしかるへきこのまゝわたらせ給へかし

とのたまへハもとよりおほしめしつることなれハ

うちへいらせたまひてたむらとのハひわを引

(26才)

すゝか御せんハことをひき十五夜のてるひの

つほねハせうかしてあそひ給ふないわうくハこ

のむかしよりちきりをき給ひしことなれハ天

にすまハひよくのとり地にあらハれんりの枝

とちぎりたまひてかたときもはなれかたくお

ほしめしけりかくてあくるはるにも成ぬれハ
すゝかこそせんれいならすしてたひはつこく
のいけのミつすますにこれるふせいして月
日かさなりけれハかたち三十二さうにしてし
まわうこんのよそほひなるひめ君いてき給ふ

(26ウ)

(第八図)

(27オ)

うつへきやうも候ハすさりなからわうとにすみ
なからいかてかせんしをそむき候へきいかさま
八月十五日にハかならずくしてまいり候へし
そのときせいをそろへてうたせ給へとかきて
かりかねのはふさにおさめ給へハ

六てうの

たいりのミなミのもん

にそ

おとし

ける

(28オ)

御名をハしやうりんこそんとそ申けるかくて
つなかぬ月日なれハ三さいに成給ふそのはつ
秋のころたむらとのえんにたちいてゝミやこ
のことをおほしめすおりふしかりかねのあまた
くもゐをとふを御らんしてあらハにてかくな
らハすゝかのたまふへきとおほしめしてふところ
のうちにてかき給ふそもくたてゑほしをう
ちてまいらせよとのせんしをかうふりすゝかの
山に三年候ひしかともみえす候あひたさたかに
たつねあひ候てちかつきあまつさへ子一人候へハ

(27ウ)

(第九図)

(28ウ)

さうの大しん御らんして大きによろこひさて
ハたむらとのハイまたこの世に有けるようち
からめとりたるにもまさりたるかゝるものゝ
ふにちかつきて子さへいてきたるらんふしき
さよとてみかとへこのよしそうもん申ていか

さままいらハからめよとて十万よきのくん
ひやうにおほせつけられける

(29才)

下

さてたむらとのすゝかにおほせられけるハ

御身きゝ給へにんけんにしやうをうけてたれ

か八千年万年をたもつへきこの山にありて

もすてに六ねんなりとしむねいかにも成なん

のちミやこへかくとつたへへ(マ)きたよりもなし

いまかやうにあひなれて候へハしせつもすき

るにをかたきとおほすへきいさらせ給へミや

こへのほりたつときところくをもミてこせ

ほたひをもねかハんとおほせられけれハすゝか

なミたをなかしのたまひけるハあふハわかれの

(2才)

ためしなれハはしめてなかくへきにあらすとのゝ

御ためにいのちをうしなハんことハ露ちりほ

ともおしからすいかなるちいろのそこなりとも

いのちにかハリなんとこそおもふにやたてゝ

おほすらんうらめしきよとのハすきにし八月

上しゆんのところえんにおハしてかりかねに

文をことつてたまひしもわらハゝしりて候

とのハこの文のとゝきたるをさへしらせ給ハね

ともわらハゝ三せんせかいをみわたし候その文

とゝきてけふこのころはハ御いて候ハんとてたい (2ウ)

りを七え八えにかためてひしめき候そやかやう

の御心ハうらめしけれともいかてかとのにそら

ことをハさせたてまつるへきしやうりん一人

候へハよからん事こそうれしけれたとひミや

こへ行候ともうたれんもうたれしもわらハか

こゝろなりいさやとのゝ御名をこうたいにあけ

むとて九月十五日にたむらとのをさきとして

すゝかとうちつれてしんつうのくるまにのり

すゝかをいてゝ三ときはかりに六てうのミなミ

のもんにつき給ふ十万よきのふしともひまなく

(3オ)

ようしんしける中をとをり給へともほんふ

なれハしらすすゝか御せんハししんでんの大

ゆかにまいり給ふたむらとのハていしやうに

しきかハしきておハしますみかとすゝかを御

らんしてたむらか思ひたるもことハリなり

かたきなからも

さらにうたんとハ

思ハれすと

おほしめし

ける

(3ウ)

(第一区)

さてすゝか御せんみかへと申させ給ふやうハ

われらかすこしたる事なに事かはんへるわ

らハゝかひくしくハ候ハねとも上かいの天人

(4オ)

なれハかいらきまさりたるによつて手をくた

しとらねともとしく御もつのはつをゝとり

のとふかことくひき入てわらハかもとへきたり

候いまこれへまいりたることなれハうちもか

らめもさせたまへと申たまふさてたむらとの

にむかひていまいとま申てかへるへしなん女

のならひわらハにこそあかせ給ふともしやう

(4ウ)

りん一人候へハつねにハすゝかへをとつれさせた

まへまたけふより廿一日と申さん日あふミの國

かまふのはらなるあくしのたか丸うちてまい

らせよとのせんしなるへしやういをさせた

まへかへすくつねにしやうりとハせ給へ

いとま申とてひたりのてをさしあけてんを

まねくとみえけれハのりてきたりしくるま

とひきたりのるかとミれハかきけすやうにうせ

にけりみかとはしめたてまつりけつけい

むかくふしきの思ひをなしきもをけし給ふ

(5オ)

たむらとのハ御心のうちにおもひあれハなく
 さむこともなしあらぬなこりに袖ぬれてまど
 ろミ給ふ事なけれハ夢にさへ御らんすること
 なしいかに我をうらめしくおもふらんだハか
 りくしてのほらんとせしをうらみしにまた
 うきたへなんとさハなれにしこといかにくや
 しく思ふへきとこひしさもせんかたなくお
 ほしめしけるさるほとに廿一日めと申にハすゝ
 かのゝたまひしことくみかとよりのせんし
 なるハあふミのくにかまうのはらといふと

(5ウ)

ころにあくしのたかまるといふまわうのもの
 ありおほくの人をほろほすにより上下のかな
 しミいふはかりなしそきうちてまいらせ
 よとて十まんよきのくんひやうを給ハリかま
 うのはらへむき給ふたかまるかしやうのてい
 をミたまへハ石のつるちを四十てうにつきた
 りいかにしているへきやうもなしたかまるハ

おやこ十六ありけるかふせきたゝかひけり

十まんきのせいともせめける事さらにきしん

にもおとらすやのゆきちかふ事雨のことく人の (6オ)

うたるゝ事かきりなしたかまるかかたにも

子どもミなうたれていまハおやこ

七人

に

なり

に

け

り

(6ウ)

(第二回)

(7オ)

あまりにつよくせめ給へハかなハすしてしなのゝ
 くにふせやかミねへそおちにけるそれへもつゝ
 いてせめられけれハふしのたけへそおちにける

そこをもつよくせめたまへハしらかハのせきなす
 のゝたけへひくなをもつゝいてせめられけれハ
 うミのなかへそ入にけるたとひたしやうくハう
 をふるともむかしよりなをおとらぬたかまるか
 たむらにうたるゝ事あるましきとて引こも
 るうミのなかなれハちからなしミやこへのほり
 てこのよしそうもん申かさねてせいをそ給

(7ウ)

へてこそせむへけれとて京へのほらんといせの
 くにまかりのしゆくにそつき給ふこれハすゝ
 ちかけれハようしんしたまへ人々としむねを
 かたきとおもふらんとのたまへハもとよりすゝか
 ハしんつうの人なれハかやうにのたまふをきゝ
 たまひてうらめしきたむらとのゝこと葉かな
 かたきとおもふほとならハいまゝてすくへきか正
 りん一人あれハよからん事こそうれしけれこの
 ことはゝうらめしけれともちきりハくちせぬな
 らひなれハゆきてむなしき事にてハあれとも

(8オ)

たむらとのかたうとしてたかまるうたせま
 いらせんとてすゝかのたちを出給ふさるほとに
 三百よきのせいともひまなくようしんして有
 ける中をとをらせたまへともめにみえされハ
 とかむる人もなしたむらとのハしやうしのうち
 にふしたまふすゝかハしやうしをあけてうちへ
 いらいかにかたきもち給ふ人のさやうにうち
 とけおハするかわらハをかたきとおほせられ
 つれとも正りんか候へハよくおハするこそ

うれしけれ

(8ウ)

(第三回)

あくしのたかまるうちかねておハするにかたう
 としてまいらせんとてまいりたりとのたまへハ
 たむらとの御よろこひありてこしかた行すゑ
 の御ものかたりあり夜もあけぬれハすゝかのた
 まひけるハ人ハひしめにこのせいともハミやこ

(9オ)

へかへしたまへたかまるうたん事とのとわら
 ハとありなハやすかるへしとて三百よきのせい
 はミヤこへかへしたまふたゝふたり四つのつ
 るきをもつてしんつうのくるまにのりミの
 ときはかりにまかりのしゆくを出てそとのほ

(9ウ)

まにつき給ふたかまるハひるねして有けるか
 そらをミてあハやひんかしのくもにしへけハ
 しくたなひくハたむらかよするとおほえ

たり田むらハよせはよせよすゝかこそおそ
 ろしけれようしんせよとそ申けるすゝか御
 せんハくるまにのりたかまるかしやうのうへ
 をとひまハリたまふたかまるハせきしんといふ
 いしの戸をたてゝいかにせめたりともうたる
 ましきとてはたらかすきてすゝかハたゝをかせ
 たまへわらハひきやうしさいのとくをもつて

(10オ)

すかしいたしうちてまいらせんとのたまへハ

たかまるおやこ七人していきをふくにしんつ
 うのくるま天に七日七夜ふきあけたりすゝかハ
 すこしもさハかせたまハすひたりの手をさし
 あけて天をまねきたまへハ十二のひこほし
 くらせたまひて日本とたうとのあひしや
 かわらりうくうのひんかしなるちゝのいはやに
 て七日七夜ミめうのをんかくをとゝのへてまひ
 あそひたまふたかまるかおとむすめ百八十にな
 りけるかなをハきわたと申けるかかくのこゑを

(10ウ)

きゝあらおもしろやてんちくにありし時こそ
 きゝつるかいまたかやうにおもしろきかくハ
 にほんにてハきかすあれをミハやと申けれハ
 たかまるハひるねして有けるかまことの
 かくとおもふかたむらか我らをたふらかしいた
 さんとのけつかうよまんのたからもほしから
 すミたからすとてふせりゐたりきわたかさ
 ねて申けるハ戸をひろくもあけハこそあら

めいしのとをほそくあけてみたまへといひ

ければハおさあひものゝあやになれハちから

(11オ)

なくいしの戸を二寸ハかりあけてミせけりちく

のいはやのうへにふたいをくミて十二のかくを

とゝのへてほうしゆをならへ天とうあつまり

てまひあそひたまふ有さまなにゝたとへんか

たもなし有かたさいふはかりなしさてたか

まるハむすめにすゝめられてわすれはてゝ一

しやくハかりあけてのそきけりそのときすゝか

のたまひけるハあハやいまこそたかまるかひた

りのまなこをいたし候そあれあそハせとのた

まへハろくちなにて候ハゝこそ海の中にて

(11ウ)

候へハいかゝとおほせられけれハあハれゆミやの

大しやうくんともおほえぬおほせことかない

てさらハわらハゐてミせ申さんとてつゝ

つき弓にしんつうのかふらやうちつかひ思ふ

ほとひきはなちたまへハたかまるかひたり

のまなこいつらぬきうしろのいはやをとを

りてもとの

うへゝそ

あかり

ける

(12オ)

(第四図)

(12ウ・13オ)

そのとき四つのつるきをなけておやこ七人か

くひをとつてひきにけりかれらかくひをも

たせていそきミやこへのほらんとおほせられ

けるにすゝかのたまふやういかゝすへきたむら

とのたかまるうちてのちハふかくたのミたの

まれんと申たりしに又かなふましきことの候

それをいかにと申にいまより又三ねんと申

さんときむつのくにきり山かたけなる大たけ

といふおにをうちてまいらせよとのせんし

あるへしかの大たけと申ハわらハをくせんとと

(13ウ)

かく申せしをわらハきかすしてとのにくしたる
よしをきゝてにくミけるめのひかりをとのハ
いなつまとおほせられしかいかさまあすむま
のときにハとりにきたるへしこのたひハと

られてゆかんと思ふなりそのゆへハかのおほ
たけと申ハたかまるせんまんよりもかれら
十人ハマさりたるおになりかれらかきたり
たらんときハたしやうこうをふるともせん
つるきあるともうちかたし我とられてゆきて
三ねんかあひたにひとつのたましるをぬきて

(14オ)

こんはくハかりあらんときやすくうたせ給ふ
へしそのためなりとのたまへハたむらとのハ
心ほそくおほしめしてミやこへのほりてもな
にかせんとしむねもすゝかへゆきてともかく
もなり給ハんをミんとのたまへハすゝかおほ

せられけるハたとひ大たけきたり候ともと

られしとられんハわらハか心なるへしこれも
とのゝ御ことを思ひたてまつるゆへなりわさ
ととられてゆき三ねんかあひたにたましる
をぬきてやすくうたせたてまつらんだめなり

(14ウ)

いそきくミやこへのほりたまへかまへてく
よき馬をたつねこのたひハ御身一人御くたり
候へとかへすくのたまへハたむらとのハちから
なくミやこへのほり給ふたかまるおやこ七
人のくひをもたせてのほり給ひていわう

の御めにかけられけれハきよかんあつてくん
こうさまくなりさてむまをたつね給へとも
めすへき御むまもなし五てう大宮にあしけ
のむまをひつたてゝ五所につなをつけてつな
きたりやせて草をたにかハぬ馬なりこれを

(15オ)

御らんしてうりむまかたとハせたまへハうち

より五十八かりなるおきないて、かハせ給へと
申さらハあすむしやのこうちのしやうくん

の御しよへひきてまいれとおほせけるおきな

むまにむかひて申けるハちくしやうといへ

ともむまハはとうくハんをんのけしんとうけ

たまハるこの三ねんかほとこれにありつるにな

こりおしさよかまへてくあすまていきて御所

へまいりてあたひをえさせよとくときけりさ

てつきの日むまをひきしやうくんの御しよへま

(15ウ)

いるとしむね御らんしてむまぬしもてなせ

とて御えんにめされけれともまいらすかさ

ねてめされけれハまいるもとよりたいしゆ

なれハひかへて十八(マ)そ給(マ)ハリけるひきてもの

をとらせよとおほせ有けれハマききぬ千疋

よろひ百りやう弓百ちやうやり百本むまの

かいりやうとていね千そくしろくらをきて

馬百疋給ハリその、ちむまのしろとてりやう

そく一くわんたまハリけり人々これをミて
あれほとやせたるむまなれハ夕さりにも

(16才)

ころひもやせんと思ふに

かやうに

おひたしく

給ハる事

た、事

ならず

と申

あひ

けり

(16ウ)

(第五図)

(17才)

太夫ハ夢のこ、ちしてあきれるたり京一はん
のひんしやなりしからくちう一のとくにんにそ
なりにけるとしむねこのむまを一の御むまや

にたてゝかハせたまひける三日と申にくいを
 四つうちて四つのくいのうちへに四つのあしを
 をきたまふさてくひをひとつぬかれて見た
 まへハ三つのくいのうちへにあしをやすめける
 のちにハくいをミなぬきてみたまへハちうに
 あかりて一しやくハかりちうにたつのちにハ
 三しやくはかりあかりてたつなをのちにハ

(17ウ)

一てうはかりあかりけるかくて日かすをふる
 ほとに三ねんと申にていわうよりせんしなる
 ハむつのくにきり山のたけといふところに大
 たけとてまわうあり日本の人をほろほして
 わかてうをまわうのすみかとなさんとすい
 そきこれをほろほしてまいらせよとのせん
 しなりとしむねおもひまうけたることなれハ
 御せいなどハ入候ましとてたゝ一人かのむまに
 うちのりたまひかすミのやたと申とねりに
 そハやのつるきをもたせ御むまのさきへはし

(18オ)

りけりさるほとに卅日のミちをたゝ一日にそ
 つきたまふきこゆるきり山の大たけかしやう
 を御らんしけれハあかゝねのつるちを四十五
 てうにつきしろかねのもんをたて入へきやう
 もなしたむらとのもんのとひらを御らんす
 れハいかなる人のかきたりけん一しゆのうたを
 かきつけたり

こそ見てし人のなさけもけふハまた

うき世に残るかたみなりけり

さてすゝかの御せんはいかにや十五夜とのいら

(18ウ)

せたまふそこれへいれたてまつれとのたまへハ
 たちいてこなたへと申給ふミなミのもんより
 入て見給ふにいろくの草木をうへたりいけ
 のなかしまにハきんきよくのはなさきミた
 れよろつ見ところありすゝかのたちほとこそ
 なけれともよしあるさまなりすゝか御せんハ
 うらミ給ふこの三とせかあひた心ならすおほ

たけにくしつるもとのゆへなりなとやかせの
 たよりにもとハせ給ハぬとのたまへハとしむ
 ねも御心にハマさりて思ひしかともきしん

(19才)

のすみかなれハきたるへきやうもなしすゝかへ
 こそつねハをとつれ候つれさてもおほたけは
 とゝハせたまへハ天ちくの大たけかしうはつ大
 りうわうといふおにあまくたりて候とてけ

むさんにいて候かあすひつしのときにかへるへ
 しひとつのたましるぬきとり候いまハこん
 はくハかりにて候とのたまひけれハとしむね
 たのもしくそおほしめしけるその夜ハみとせか
 ほと御物かたり有てさめくとなき給ふさて
 よもあけてひつしのときにもなりぬれハくま

(19ウ)

なきそらもかきくもるいかつちおひたゝしく
 なりにたり風さハかしくふきらいてんして
 七八里ほとちかつけハものかたりのこゑ聞ゆ

るやうくちかつけハ大をんあけて申けるハ

こハいかに我くかはなそのにあしけのうまを

つなきたるハいかさまたむらめかきたりたる

とおほえたりたきやうのひまをうかゝひて

きたれるハくせ事なりとのゝしりけりこの

うちに人ハなきかわかきたるをしらぬ事ハ

よもあらしもんをあけよと申けれハ返事

(20才)

するものもなしたむらとのハひわを引すゝ

か御せんハことをひき十五夜のてるひのつほ

ねハしやうかして心しつかにあそひたまふ

おほたけいかりのゝしりけれともへんしも

せすあまりにはらをたてこのもんのうち

にハミゝあるやつハなきかなんとゝのゝしる

こゑにつるちもくつれもんもわれぬさて

うちへいりけるをみたまへハたかさ四十ちやう

こしのはたハリ十二ちやうおもてハ七十三ま

なこハ三百八十なりミゝハ三百六十くちより

(20ウ)

五しきのいきいたすハほむらのことしそらの
 かすミとなる大をんのこゑをあけて申やう
 らうとうのおにともハ

なきか

たむらめを

ほうちやう

せよと

けち

する

(第六回)

たむらとのも大をんにておほせられけるハ
 ミもすそ川の御なかれ十せんの君の御つかひ
 にてこれまできたりたりいかてかわうの
 せんしをハそむくへきとのたまへハ大たけは
 三時はかりわらひて申けるハこのそくさんこく
 にもわうかあるかよ天ちくに我らかしうのハ

大わう二代のかうちせん大わうたうとに七御

門しんたんこくに八人これこそわうとハいふ

へけれひとつのしまをりやうするものをハ

わうとハいはぬそしまのおさめとこそいへ

(22才)

ことくしくわらふこゑ天地もひくハかり

なりまことに一とせくるまにのりて大はう

へゆきしくハしやか事か一くちにもたるまし

きとおもひしをしハしとおもひてたすけを

きたれハかゝるむほんをくハたてけることよ

おにともよりてたむらめをほうちやうせよ

とのゝしりけれハさうろはや風ミるめきく

みゝ大くち三ちかな太郎などゝいふおに九人

われもくゝととんてかゝるたむらとのハそハ

やのつるきをぬきおにの中へなけたまへハ九

(22ウ)

人のおにとも一人ものこらすうたれけりい

まハおほたけ一人に成にけれハ大とうれん小

とうれんけんミやうれんそハやともに四つ
のつるきをなけたまへハ四つのつるきにせめ
られて七十三のおもてもけつりおとされ三

百八十三のまなこもきりつふされ又三百六

十のミ、もなしあまりにつよくせめられて

たえかたさに申やうなにしにとうしんもなき

身をほうしになすそたむらかしゆくせのか

たきとてかくするそとておとりあかりける

(23オ)

そのときつるきまひあかりて大たけかくひ

をうちおとすくひしたへハおちすしてそらへ

あかりてくちおしやたむらにあひてふかく

をしつる事よとてそらにひ、きてしんとうし

けるす、かの御せんおほせけるハこのかしらた

むらとのか、らんつらんあやまちたまふ

なとてよろひ三りやうかさねてきせまいら

せかふと十はねきせまいらせたまへハあん

のことくかのかしらなりくたりてたむらとの、

めしたるかふとのうへにおちかゝりてかふと

(23ウ)

九はねまてかミくたきいま一はねハかりのこ
りけるとき

すゝか

けんミやうれん

にて

とゝめを

さし

たまふ

(24オ)

(第七図)

(24ウ)

そのときよりかふとのくハかたといふ事ハはし

まりけるかのおほたけかはの入たるかたなりさ

てたむらとのほんまうをたつしてはやミや

こへのほらんとのたまふところにするゝかおほせ

ありけるハたかまるおほたけうちてのちハ

なかくたのミたのまれんと申たりしにおほ
たけゆへにむなしくとし月をくくりぬいま

ハひさしくそひたてまつるましきことの候ぞ

れをいかにと申にかのすゝかやまをたもつもの
ハ下くハほうのものは十二中くハほうのものハ

(25才)

十七上くハほうのものハ廿五すこさす候にこと
し廿五になり候来月五日にハかならずむしやう
の風にさそハれめいとへおもむき候へししやう
をうくるたくひさんやのけたものかうかのう

ろくすまでもわかれをかなしむならひなり申
さんやにんけんのならひなれハ御名残おしく

ハ候へともあふハわかれのならひいまさらなけ
くにかひなしはやくミやこへのほりたまへ

我ハすゝかへかへりなんとのたまへハたむらと
のハミやこへかへりてなにかせん我もおなしく

(25ウ)

すゝかへゆきともかくも成たまハんをミてわ

か身をもはからひ候ハんとのたまへハすゝか御
せんおほせハうれしく候へともいそきミやこ

へのほりたまひおほたけかくひをもてい

わうの御めにかけさせたまひてやかてくたらせ
たまへとおほせられけれハねんころにいとま

こひしなくくミやこへのほりたまひかのおほ

たけかくひをていわうの御めにかけられけれハ
きよかなのめならすつけいうんかくもんせ

むにいちをなして上下これをみきくなりさ

(26才)

るほとにかのくんかうにハからのくにをはし
めとしてそのほか國あまたまいらせられけ

れとも御心になけきあれハやかてすゝかへく
たりたまひて見たまへハはやきえはてた

まひぬとてしやうりん御せんをはしめと

してなけきかなしミ給ふ事かきりなしたむら
とのハ御そハへよらせたまひて御らんしけれハ

色もかたちもかハリ給ハすいかにやとしむねこそ

まいりて候へいま一たび御めを見あせたまへと
なげきかなしミたまへハそのとき御くちハたら
(26ウ)

くやうにみえたまひてはらのうちにこゑあり
てとのにいま一度みえたてまつらんとていま
たちう宇にまよへりこのよに思ひをくことハ
なししやうりん十五になるをもミすしてかく
れぬる事こそしての山ちのさハリとなるへしか
まへてくわらハなくとも正りんいとおしミた
まへ大とうれん小とうれんハとのにたてまつる
けんミやうれんハ正りんにとらせ候われくかひ
きやうしさいと申候ハ大とうれんをぬきあさ日
にあてみ候へハ三千大せんせかいハミなくまな
(27オ)

このまへにみえ候ふうふハ二世のちきりと申
いまハいとま申候とてこゑとまりいろかハリ
つるにむなしく成給ふさてたむらとのは
あまりのなげきに七日と申にそのまおもひ

しにむなしくなりたまひけりたむらとのめ
いとへおもむき給ふくしやうしん十わう御らん
してゑんまのちやうをひきてこれハひはうの
ものなりいそきしやはへかへれすかハちやう
こうなれハかへすましきとおほせけれハたむら
とのたまふやうすかをかへし給ハすハ我しや
(27ウ)

はへかへるましきとのたまふそのときゑんま
わういかりをなしたまひてたとひひこう
なりともたむらをハちこくへしつむへしと
のたまへハくしやうしんうけ給ハりてひつ
たてんとすそのときたむらとのえんまわ
うもときによりてこそおそろしけれいま
ハしゆくせのかたきなりとて大とうれんを
ぬきてゑんまわうにかりたまへハこのつる
きハもんしゆのけしんなれハこくそついかて
かやすかるへきくハえんとなりてたいしやく
(28オ)

たうゑもえのほるえんまわう大きにさハ
きたまひて

すゝかを

おなしく

かへすへしと

おほせ

あれ

は

(第八図)

こくそつ申けるハすゝかハちやうこうのもの
なりからたもいまハ候ハす候いかにしてかへ
すへしと申けれハつくしひうかのくにゝお
なし日のおなしとくにむまれたるものなり
ひこうのしにのものにすゝかのたましるを
いれかへたまへハすかたひころにかはりてわ
ろし又たむらとのゑんまわうにのたまひ

けるハもとのすかたになしてたまハリ候へと

申されけれハたい三のミやうくハんをつかひ

にてたいしやくに申たまへハやかていわう

(29ウ)

ほうしやくのくすりをあたへもとのすかたより

なをいつくしくつくりてかへし給ふ三ねんの

いとまをたまハリけるめいと三ねんハしや

(28ウ)

はの四十六ねんなりさてたむらとのハめい

とよりすゝかをひきくししやはへかへり思ひ

(29オ)

のまゝにさかへたまふ

いせやひうかの物かたり

とハ

この事

なり

(30オ)

(第九図)

すゝかの山をハ正りん御せんにゆつり給ひて

(30ウ)

御身ハふもとにしものこせんといはれたま
 ひていまにたえせすさてたむらとのハわか
 てうのまわうきしんをたいらけたまひて國
 のまほりと成たまひてつるにハすゝか山
 のふもとに神とあらハれたまひてたむらの
 ミヤとていまにしよ人あゆミをはこひかつ
 かうす有かたきためしとかやされハ大とう
 れんせうとうれんつのでつき弓ハいまに
 かのたむらのミヤにおさまりてありけん

(31才)

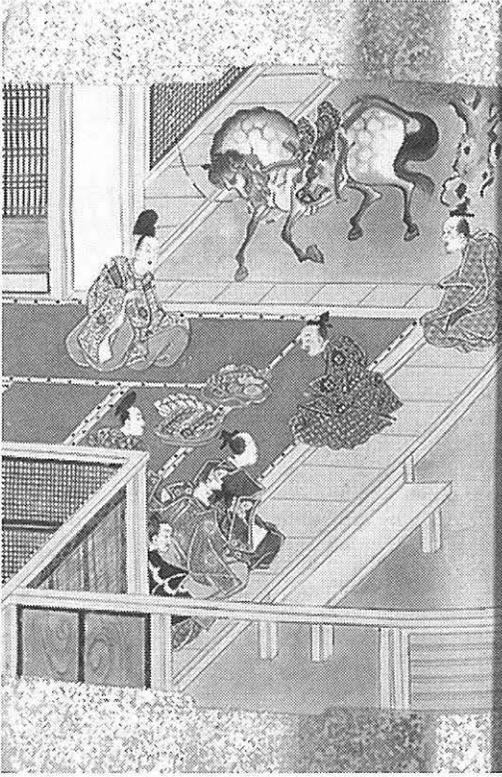
のふもとにあとをたれたまひて天下のあん
 をんをまほり給ふなりとかしのせんそのもの
 かたりなり

(31ウ)

ミやうれんハすゝかのみねにつたハリてあり
 又そハやのつるきハ一とせさいかいのはとう
 にてふとうミやうわうとたゝかひたまひし
 ときめしたる御よろひかのりやうしゆハとかし
 のいゑに代々につたハリいまに有とかやかゝ
 るかうなるけんしんハせんたいもいまたな
 しまたさふらひにも有かたしされハふさい
 の御子もともに神となりいせの國すゝかやま

さくらかり雨ハふりきぬおなしくハ
 ぬるともはなのかげにやとらん
 夜とゝもに花のほひをおもひやる
 こゝろやミねにたひねしつらん

(32才)



(下巻第5図)
俊宗、京中で馬を求める。



(中巻第7図)
俊宗、鈴鹿御前と戦う。



(下巻第9図)
鈴鹿御前、冥界から戻る。



(下巻第7図)
大嶽の首が俊宗の甲にとびかかる。